

浜に笑顔



「生でもちりめんじゃこにしても最高」。アカガイと並ぶ名物にしようと今年、シラス漁の本格操業が始まった関上漁港。水揚げしたばかりの新鮮なシラスを手ですくって「これで浜を盛り上げたい」と漁師の小斎力男さん(74)=名取市関上

車窓から



山下駅から仙台市の調理師専門学校に通う伊藤理紗さん(19)。常磐線のおかげで遅刻せずに「すみませう」と笑顔。間もなく出来秋の水田を車窓から眺めていた。宮城県山元町

JR常磐線を訪ねて

東日本大震災6年半

東日本大震災から間もなく6年と半年だが、JR常磐線はいまだ分断されたまま。津波に加え、東京電力福島第一原発事故に直撃されたため。それでも少しずつ線路は延び、福島県と宮城県の被災地をつなぎ始めた。沿線に住む人たちの暮らしも変わりつつある。仙台の学校や病院へ、以前より格段に行き来しやすくなった。線路が内陸に移動して高架式になった宮城県南では、新しい街づくりも進む。残るのは地元産の産業。津波と原発事故のダメージは並大抵でなかった。もともと盛んなった農業はまだまだ復興途上だが、交通網の復旧をきっかけにかつての活気を取り戻そうと頑張る人も目立つ。南東北の被災地を貫く常磐線は来月、福島県の富岡―竜田橋(葉町)間で運転を再開する。全線開通はまず先のことだが、急ピッチで変わりつつある沿線を訪ねてみた。(写真部震災取材班)

つながる日まで



希望運ぶ



震災前より内陸に移転し、高架式となったJR常磐線走る車両。新しい町並みを走り抜け、復興のレールは延びる。宮城県山元町

未開通の竜田―浪江は今も代行バス。1日2往復だが、住民が自由に立ち寄れない地域もあるため富岡駅以外は停車しない＝8月31日、福島県楢葉町

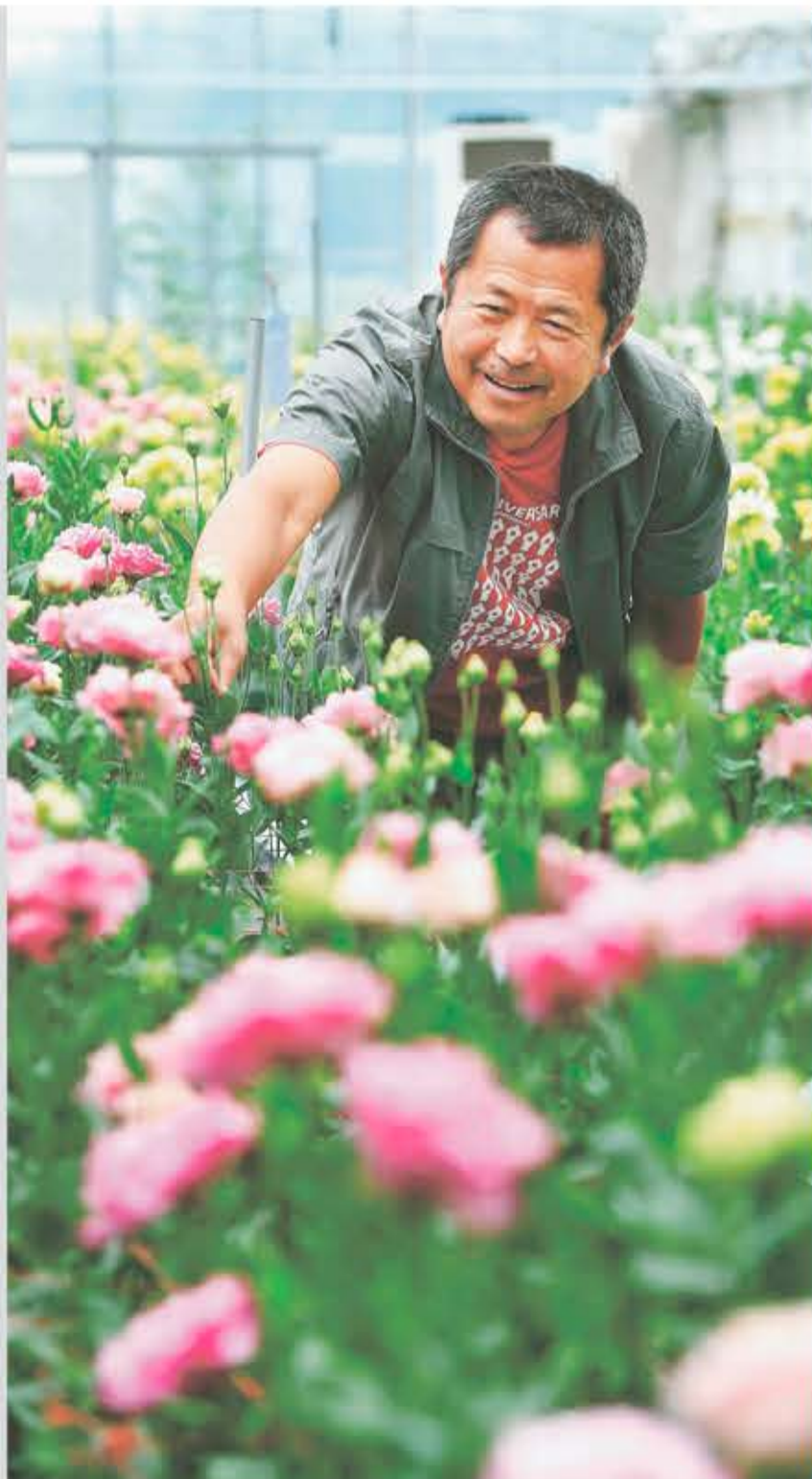


今もなお



帰還困難区域を南北に走る国道6号。車の窓から、廃炉作業が続く福島第一原発の排気筒や大型クレーンがはっきり見える＝8月31日、福島県大熊町

自慢の花

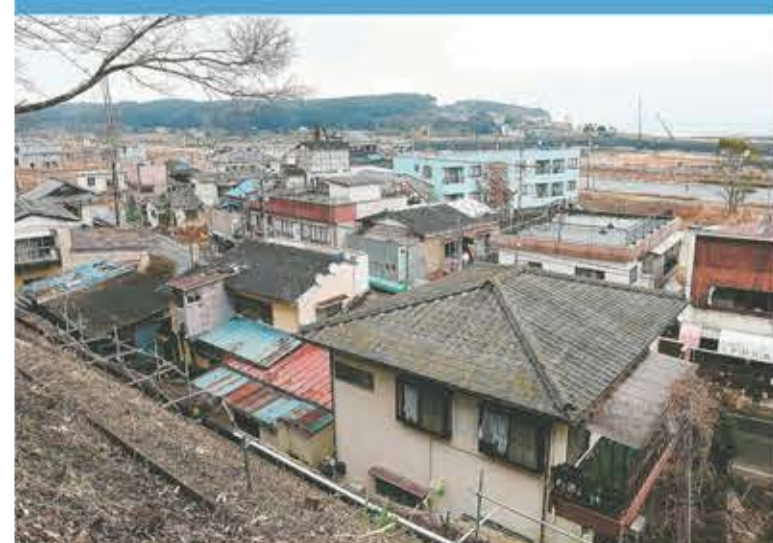


浪江町の農家川村博さん(62)が育てた大輪のトウキョウ。全町避難中の2014年から花作りに挑み、現在は市場で高い評価を受けるまでに。「目指すは日本一。自慢の花で町の活気を取り戻したい」

来月21日、竜田駅(福島県楢葉町)との間が開通する富岡駅。新駅舎と周辺は着々と整備が進む＝8月31日



もうすぐ



昨年1月の富岡駅周辺の様子。津波と原発事故によって、手付かずの状態が続いていた